

母親たちを支える活動

レバノンの
シリア難民
の状況

ブルジバラジネ・キャンプでは毎月、母親を集めたワークショップを開催しています。参加した母親25名のほとんどは、シリアからレバノンに避難してから2、3年が経っているにもかかわらず、ほとんどキャンプの外に出たことがないと言います。外にできることがあってもビザの手続きなど非常に限られた場合だけです。また、シリアからの避難民というだけでいじめを受けることがあり、環境にも慣れずとてもつらいと語ります。

「シリアでの安全がたとえ50%でも保障されるなら、今すぐにも家族と一緒にシリアに帰りたい。たとえISISに殺されることになったとしても」と一人が語ると、参加者全員が同意しました。レバノンの難民キャンプでの生活の厳しさを何よりも物語っています。将来を不安に思ったり、自分を責めることが多く、不眠状態だと答えた人もいました。

ワークショップではリラクゼーションを目的としたセラピーにも取り組んでいます。自分の身体の輪郭線を描き、痛みや疲れを感じる部位を鉛筆で示してもら



います。多くの母親が肩、心臓、婦人科系の器官に痛みを抱えているような描画をしました。そして、自分をいたわるような言葉をかけながら、好きな色を選んで好きな色を使って痛む部位の周りに彩色をしていきます。

Fさん(44歳)は、「自分は若くないし、夫も病気だし、生活も厳しく、明るいものが何も想像できない」と語り、心臓や腹部を黒く塗りつぶしました。そして「自分には何の取り柄もないので、いたわる言葉をかけるのは難しい」と言います。そこで、「私は家族の食事を作っている、夫や子の面倒を見ている、掃除・洗濯・買い物をしている」と、毎日多くの労働をこなしていることを皆で確認しました。Fさんも「自分はよく頑張ってきた」と声を出しながら、紫色のクレパスを選んで彩色できて、「つら

- レバノンにはシリア難民が120万人以上流入(レバノン人口の4人に1人)。シリアに住んでいたパレスチナ人の約半数5万人が既存のパレスチナ難民キャンプ流入し、人口が過密状態に。
- 45%が一日1回しか食事をしていない。
- 1か月間に85%が食料不足を経験し、食事の回数を減らし、5歳以下の子どもの91%が一日に必要な食料を摂取していない
- 92%の世帯にトラウマ症状の家族がいる。
- 子どもの36%は通学機会を得られない。また、3分の2の子どもが不登校である。

い思いを共有し、自分に励ましの言葉をかけることで、晴れやかな気持ちになりました」と語ってくれました(他にも母親のワークショップでは、遠足、子育て、栄養、シラミ対策、古布を使った織物などをテーマにしています)。

過酷な経験と生活環境の変化によって大きなストレスを抱え、怒りをコントロールできない母親が増えています。精神科とカウンセリングの専門機関であるファミリーガイダンスセンターでは、ソーシャルワーカーと臨床心理士が子どもへの対処方法、感情の原因、ストレスの解消方法等について話し、自宅でもできるようなリラクゼーションを行うワークショップを実施しています。先行きが見えず悪化していく避難生活、貧困、家庭内暴力などに加え、シリアに残してきた家族の安否を考えると眠れないというケースが多いからです。リラクゼーションや怒りのコントロール方法を学び、自分のための時間を取るようになったことで、気持ちに少しだけゆとりが出てきたと、笑顔を徐々にみせるようになりました。母親たちの自尊心回復は子どもへの虐待防止につながっています。

